

文化講演会のお知らせ



講師：谷川道子氏

演題：「肝っ玉おっ母」から「度胸アンナ」へ——ブレヒト演劇の地平

日時：2010年3月13日(土) 14:00~16:00

会場：東京外国語大学本郷サテライト4F

講師紹介：1946年鹿児島県生まれ。東京外国語大学教授（ヨーロッパ第一課程ドイツ語専攻・総合文化講座担当）。ブレヒトやハイナー・ミュラー

一、ピナ・バウシュを中心としたドイツ現代演劇が専門。著書に『娼婦と聖母を越えて——ブレヒトと女たちの共生』（花伝社）、『ハイナー・ミュラー・マシーン』（未来社）、『ドイツ現代演劇の構図』（論創社）など。共編著に『劇場を世界に——外国語劇の挑戦』（新宿書房）、『境界の言語』（新曜社）など。訳書に、『ハイナー・ミュラー・テキスト集』（共訳、全3巻、未来社）、エルフリーデ・イエリネク『汝、気にすることなかれ——シューベルトにちなむ死の三部作』（ドイツ現代戯曲選30、論創社）、『ポストドラマ演劇』（共訳、同学社）、『ピナ・バウシュ——怖がらずに踊ってごらん』（ヨッヘン・シュミット著、フィルムアート社）、『ロッテ・レーニャ——ワイマール文化の名花』（ロナルド・スポーター著、文芸春秋社）、『ブレヒト作業日誌』（共訳、全2巻、河出書房新社）、ブレヒト『母アンナの子連れ従軍記』（光文社古典新訳文庫）など多数。

概要：ドイツの劇作家で、詩人、演出家のバルトルト・ブレヒト[1898-1956]は、1922年にミュンヘンで初演された『夜うつ太鼓』で一躍脚光を浴びて劇作家としてデビューするが、ヒトラー政権の弾圧を逃れ、33年から北欧、アメリカと地球を1周する亡命生活を続けた。戦後は東ドイツに戻り劇団ベルリーナ・アンサンブルを設立し、ふたたび演劇活動を再開。「異化効果」や「叙事的演劇」をはじめとしてさまざまな演劇理論を生みだし、その演劇実践と作品で、戦後の世界の演劇界にも大きな影響を与えた。代表作に『三文オペラ』や『ガリレイの生涯』などがあるが、なかでもスウェーデン亡命中に書かれた戯曲『母アンナの子連れ従軍記』を中心において、ブレヒト演劇が目指した地平を考える。この作品は、これまで『肝っ玉おっ母とその子供たち』の題で知られていたが、このたびの光文社古典新訳文庫のための拙訳では『母アンナの子連れ従軍記』と改題、その理由や、さまざまな舞台化の諸相にも触れてみたい。

申込み・問合せ先：東京外語会事務局 Tel:03-3815-5877 Fax:03-5842-8377

E-Mail:t-gaigo@path.ne.jp

講演の後、講師を囲んでサテライト8Fにて懇親会が開かれます。

会費は1000円（会費は講演の聴講費、資料作成費、講演会後の懇親会費にあてられます）